

Title	19世紀前半世紀デンマークにおける反ヘーゲル主義思想の系譜： キルケゴール理解のための1つの前提
Sub Title	Genealogy of anti-Hegelians in Denmark's mid-nineteenth century : one premise for understanding the thought of S. Kierkegaard
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.23- 46
JaLC DOI	
Abstract	The infinite depth and value of a thought are radically ignored under the schematized interpretation. The thought of S. Kierkegaard has especially been under such a treatment, because it is used to be interpreted under the simple schema : Anti-Hegelianism. Such a interpretation is not always wrong, but means that his thought is taken up only in relation to Hegel, which is merely one side of his thought. But we can not grasp the essence of S. Kierkegaard's thought from such a view-point. So we must try the other work in order to know the infinite depth and value of his thought. And yet we must pass many stages for the work. But one of them, the most fundamental work, is to clarify the thought-historical background and soil peculiar to his contemporary Denmark, in and from which his thought grew up. And this is the first work which we should try. This paper is a mere note of such a work.
Notes	第五十集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19世紀前半世紀デンマークにおける 反ヘーゲル主義思想の系譜

——キルケゴール理解のための1つの前提——

大 谷 愛 人

1. 状 況

キルケゴールに関してはありとあらゆることが誤解のたねになっている。その一つに「ヘーゲル哲学とキルケゴールとの関係」がある。大方の理解は次のようなものだと思う。当時デンマークの思想界にはヘーゲル哲学が風靡しており、キルケゴールはこれと闘って「個別性」の思想を打ち出したのである、と。しかしこれは大へんな誤解である。確かに当時、J・L・ハイペーアとそのグループ、並びにH・L・マルテンセンなどはデンマークにおけるヘーゲル哲学の代表のように言われ、その勢いは大したものであったが、両者とも途中から転向してしまったのである。従って他はおしてしるべしである。それ故キルケゴールの思想をその様な「ヘーゲル主義」に対立する「反ヘーゲル主義」という図式で理解しようとするならその核心は完全に見失われてしまうだろう。というのは、キルケゴールは自らの思想を「反ヘーゲル主義」として打ち出したのではなく、彼が登場する以前にデンマークには、「ドイツ哲学」をうけ入れ育てるには全く不むきの、それとは本質的に異ったデンマーク独自の思想的精神的風土があって、これが1840年当時には、本質的に「反ヘーゲル主義」の働きをすることになったので、この風土の中でもっとも純粹に、かつ厳粛に育ったキルケゴールの思想は、当然に、「反ヘーゲル主義」的輪廓をことのほか鋭

く光らせることになったまでだからである。従ってキルケゴールの思想のそれを単に「ヘーゲル思想」と図式的に比較することは殆んど意味のないことがわかる。そこで、それを正しく理解するには、先ず基礎的な作業として、彼の思想を育くみ、いわばその生命源ともなっているデンマーク独自の思想的精神的風土の内容を明らかにしておくことの方がはるかに重要であり、かつ必須の急務でもある。ところで、本小論はそのような課題にささやかながら応えようとした一つの試みである。

当時コペンハーゲンには反ヘーゲル主義的色彩の思想を持った人々は、広範の層にわたって存在していた。しかしこれらの人々は三つのグループに分けることができる。一つは国教会の牧師たちのグループであり、それは、彼らの神学的立場からである。もう一つはおもに詩人及び文学者のグループであるが、彼らは、主として「バイロン-ハイネの思想」を体現している人々である。更に、もう一つは、おもに思想家及び哲学者のグループで、「個別性の思想」を主題としている人々である。三者は、いずれももちろん共通に「個人的内面性」を主題としていたが、それを扱う方法が異っていたために、そのように三つの形態をとっていたわけである。以下この三つのグループに即して、それに連なる人々の思想的状況を検討してみよう。

2. 国教会の反ヘーゲル主義思想

国教会の中にはヘーゲル主義が殆んど浸透しなかったことは既に述べた通りであるが、これは、デンマーク人的体質と相俟って国教会の神学的立場が、ヘーゲル的思想体質とは凡そ異質のものだったからである。神学者たちの共通の見解は、ヘーゲル的な「体系」の中では「信仰」が不在になるというものであった。ところで、それら反ヘーゲル的神学者の代表的なものが、J・P・ミュンスター監督 J. P. Mynster と E・C・トリュー

ザ E. C. Tyde である。

1. J・P・ミュンスター監督 J・P・ミュンスターは、キルケゴールの激しい攻撃をうけたために、まるでヘーゲル主義者の重鎮のように誤解されるが、それどころか彼こそ反ヘーゲル主義の急先峰であった。

ミュンスターは、ハイペーア J. L. Heiberg といくたびも論争を行ったが、それは、先ず、ハイペーアの著作『現代における哲学の意義について』Om Filosofiens Betydning for den nuværende Tid (1833) をめぐって行なわれた。ミュンスターは、この書物におけるハイペーアの見解に対し、D・スゴウ教授の『週刊デンマーク』紙に、『宗教的信念について』Om den religiøse Overbeviisning (1833) と題する反論を書いた。しかしこの論文は、Kts という偽名で書かれている。ミュンスターの攻撃の目標は、ハイペーアの次の言葉である。

「人は次のことを深く考えてみるべきである。——現代の正直な信者たちの間には、即ち、自己自身のためにだけ生き、決して他人のためには生きない人々の間には、人が神の存在と靈魂の不死性とを数学的命題を証明するように簡単に証明出来るようになったこの今においても、その証明を意欲的に、然り、感謝しつつ把握しようとはせず、また、曾てよりも幸福に感じようとしなないところの者が一人いるかもしれないということ。彼が曾て確固とした信仰と称したものが、単なる希望以外の何ものでもなく、従ってそれは懷疑であるが、しかしこの今ははじめてほんとうの確信をもつに至ったということ、彼は認めようとしなないのだろうか？」⁽¹⁾

ミュンスターは、これに対して大要次のように述べている。

この言葉は、凡そ的をはずれ、宗教は少しも痛痒を感じない。また、ハイペーア自身がキリスト者の一人にかぞえられていることを考えるなら、語法の相異にすらならない。ハイペーアは、今日のキリスト者について、軽侮の念をもって語るが、彼の哲学は、神的なものをそれらキリスト者たちにもたらす啓示にもとづくほんとうの敬虔さによる刺戟とは別ものである。⁽²⁾

この論争はまだ前哨戦にしかすぎない。というのは、この論争の頃、ミュンスターは、ヘーゲル主義の流行は、ヘーゲルの死をもってまもなく終るだろうと信じていた。ところがそうすぐには止まなかったもので、更にもう一回前哨戦如きものをやった後、1839年本格的な論争を行った。

その本格的な論争は、ミュンスターが、『文学と教会のための雑誌』Tidskrift for Litteratur og Kirke に、『合理主義と超自然主義』Rationalisme of Supranationalisme という論文を出したことをもって始った。ハイペーアは、この雑誌の同じ号に、論理的論文『矛盾の原理と排他の原理について』Om Contradictions-og Exclusions Principet を掲載した。ミュンスターは「合理主義と超自然主義はもう陳腐になった。この両者の立場の媒介はおこり得ない」という従来のハイペーアの説を非難したのである。ハイペーアが、その機会をとらえて、反論したのがその論文であった。ハイペーアは、それによって、ミュンスターが錯誤の中にあることを指摘した、即ちミュンスターは論理学の原理はただ有限的なものと経験的なものにだけ妥当するという見解に立ちながら、しかも無限なものの命題と有限なものの命題とに関し媒介は二つの対立命題の間においては排他的であるという論理学の原理を用いているが、こういうことは、大きな錯誤である、となすのである。

この論争は大へん印象深いものだった。ミュンスターは、彼の自伝「私の生涯についての報告」J. P. Mynster: Meddelelser om mit Levnet. S. 239. の中で、このことを記している。また、彼は1839年6月18日付の手紙で、長男のヨアキムに次のように述べている。

「私は、ヘーゲル的な原理について、ハイペーア及びマルテンセンと長時間にわたる興味ある論争をした。しかしこの論争は、反対者たちの側からの全き信頼において行なわれた。もし私にもっと時間があったなら、この論争をもっと展開することができたのだったが。けれども私は、昨日長時間マルテンセンと哲学の話しをし合った。勿論われわれは、そのような論

争にも拘らず最上の友人同志なのだ。それにマルテンセンは、ハイペーアとはちがって、厳密な意味でのヘーゲル主義者ではない。⁽³⁾」

さてミュンスターは、あのハイペーアの論文に対しては、2年後、再び『文学と教会のための雑誌』第7号に、『論理学的原理について』Om de logiske Principer と題して反論をのせた。内容は以前のものと同様でかわってはいなかった。しかし、『自伝』によるなら、ヘーゲル主義についてのハイペーアとの論争は、この論文をもって終わった、と言っている。⁽⁴⁾

ミュンスターの主張は、オーソドクス信仰の啓示論の立場は、ヘーゲルの宗教哲学とは凡そ次元の異ったものだ、という見解に貫かれていた。

2. E・C・トリューザ 彼は後年副監督になった人物であるが、一時はハイペーア・サークルに属していた。しかし彼は『デンマーク文学雑誌』Dansk Litteraturlisten (1833) の中にヘーゲルへの批評を書き、懐疑的であった。彼はそこで一般的な反論を述べているが、先ず、その書き方がいかにも面白い。「しかしいかなる読者も、ハイペーアが哲学的著作家として活動することを止めるよう願ってはいないだろう——たとえ彼が、その著作において、われわれの真理感情や審美的感情と同時に宗教的感情をふざけた仕方で傷つけたとしても。⁽⁵⁾」と。ところで、彼の主張は、次のようになる。たとえ神学が哲学を必要とし、ヘーゲルの思考がもはや無視され得ないということが事実であるとしても、しかし神学に哲学との関係において第二の地位を割りあてるということは、絶対に誤りである。ハイペーアが、宗教を、われわれが、それにおいては哲学の純粋な概念において把握し得る限りのもの以上のものとは出会えない詩や芸術と同じような下位の媒介形式より以上のものとしては認めないことは、決して自分は同意出来ない、と。

これに対して、ハイペーアは、同誌の次号で、丁重な一文を書いている。しかしハイペーアは、トリューザを「デンマークで、私をヘーゲル哲学の精通者と認めることのできた最初の著作家」となしているが、その一文の

要旨は次のようなものであった。トリューザは、一連の諸点において、自分（ハイペーア）と同じ意見であること、ヘーゲル哲学をもはや無視し得ないものと認めたこと、しかし、トリューザの「思惟よりも高次の現実性が存在する」という見解は正しくないこと、以上であった。⁽⁶⁾

そこでトリューザは、再び、同誌に反論したが、彼は自分の見解を次のような言葉でまとめた。「このたびの論争は、神学の存在のための闘いであり、……然り、本来の宗教生活全体の存在のための闘いである。……このヘーゲル哲学に対する闘いは、恐らく今まで歴史上で行なわれた論争のいかなるものよりも厳粛なものとなるだろう、何故ならば、この哲学は、その深さと首尾一貫性と類例を見ない完結性において、今までのいかなる哲学をも凌駕しているように思えるからである」⁽⁷⁾と。

このトリューザの見解も、要するにキリスト教が哲学とは異った独自の領域のものであるという主張に裏付けされている。

以上ミュンスターとトリューザはヘーゲル思想に対する国教会の牧師や神学者の共通の見解を述べているが、その立場は調停的神学 Mæglingsteologi の立場である。ところでキルケゴールは、この調停的神学にをうけとめそれに対逆説的反省を貫ぬいた立場に立っている。

3. バイロンーハイネの思想

1825年以後のデンマークの文学界は、文学手法、或は文学技術という点からみるならば、V. ユーゴーやフランスのロマンティズムの影響を極めて大きくうけた。つまりそれは、複雑極まりない「人間描写」のための新鮮なる感覚と手法とを与える働きをした。この時期のデンマークの詩人たちは、そのような影響のもとに、「人間存在」の複雑さというものをしっかり見つめ、それを丹念に描くようになった。また、ユーゴーの中に見られる「反抗精神」も少なからず共感をもち得ていた。こうしてデンマーク

の詩人たちは、「人間」の「現実性」を捕える努力をしていたのである。ところでこの文学技術が決定的な意味において生かされたのが、「パイロン-ハイネの思想」に連なる人々においてであった。

当時デンマークの文学界、精神界を決定的に支配していた思想は、パイロンの思想である。詳しくは、パイロンを主体として、(グリルパルツァー、メーリケ、シュティフターなどを含め)レーナウ及びハイネに象徴される思想である。しかしもっと正確に表現するならば、パイロン-ハイネの思想が支配したというよりも、パイロン-ハイネ的精神状況と、この時期のコペンハーゲンの精神的状況の完璧な一致が成立していた、と言うべきであろう。この線の思想は、人間の内部の分裂、「精神」の病、メランコリーをその精神的状況として成立しているか、デンマークの文学界及び精神界は、正にこの時期自らがそうであった「メランコリー」及び「憂鬱」Tungsind という精神的状況を、パイロン及び前述の人々を通じて、文学の問題として取り挙げるようになったのである。このようなわけで、パイロン-ハイネ思想は、社会的流行にまでな⁽⁸⁾った。例えば、当時コペンハーゲンのカフェーにはパイロンの作品やハイネの作品に登場してくるメランコリーの人物と同じ黒い衣裳をつけた青年たちが出没し、それは、いかにも時代の精神的状況が、「懐疑」「憂鬱」「不安」「絶望」であることをそのまま髣髴させているようであった。

この線の思想がコペンハーゲンに入ってきた順序を述べるなら、次のようになる。先ずパイロンの思想が入り、次に、パイロンの有能な弟子のレーナウの「ファウスト」が入ってきた。こうしてコペンハーゲンの「懐疑」が、つまり、「メランコリー」及び「憂鬱」が、掘り下げられているとき、スクリーブ及びハイネにおける懐疑的な「イロニー」が入ってきて、この状況と結びついた。とくにハイネの「イロニー」の場合は、パイロンやユーゴーの「反抗精神」及び「イロニー」が当時のドイツの政治的状況と結びつく過程の中で生れているので、これがコペンハーゲンで再びパイロン

と結びつくのは当然である。とにかくこのようにして、コペンハーゲンがそれにおいてある「バイロンの状況」の問題性は、もっとも鋭い形で取り挙げられることになったのである。⁽⁹⁾次にこのバイロン-ハイネの線に連なる文学者、詩人の代表的人物について簡単な説明をしておこう。

1. クリスチャン・ヴェンダー Christian Winther (1796-1876) C・ヴェンダーは、1808年父を失い、そのため母は、1811年教区牧師R・メーラーと再婚したため、そのメーラーの息子、つまりキルケゴールの師ポール・メーラーとは、腹ちがいの兄弟関係になった。ヴェンダーは、子供の時から、女性の愛情にひかれ易く、そのため、彼の詩は、常に、その時々彼の恋愛関係を背景としている。しかし彼の抒情詩には二つの特徴がある。一つは、その恋愛詩が、デンマークの自然、とりわけシュランの自然を背景とし、それとの見事な調和のもとに描かれていることである。もう一つは、愛を苦悩として感じており、そのため、彼の詩は、同時代の精神的状況を描いていたことである。彼の詩にもっとも大きな影響を与えたのは、最初は、デンマークの最初のロマンティック詩人A・G・エーレンスレーガーであったが、やがて、バイロン及びハイネであり、彼は、それらを通じて、自らの危機的状況を生きぬいた。彼において、「愛」と「自然」はその美しさを一きわ輝かせたが、その美しい調和の背後には、バイロン-ハイネ的な「苦悩」に疼く精神が深い呼吸をしていたのである。⁽¹⁰⁾

2. ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen (1805-75) デンマーク文学史上におけるアンデルセンの位置を厳密に規定することは極めてむずかしい。もちろん彼がロマンティックの流れに属することは明らかであるが、彼の詩には、一面他のさまざまな詩人に関する要素があると同時に、他面極めて独自の領域を切り開いた要素がある。しかしここでは、ヤンセン教授の分類に従って、この系統に含めることにする。⁽¹¹⁾

アンデルセンに特別大きな影響を与えた詩人は、ホフマンとハイネであ

る。ホフマンは、彼に、夢想や幻想の世界への靈感を与えた。『ホルメンの運河からアマヤの崎までの徒歩旅行』Fodrejse fra Holmens Kanal til Østpynten af Amager (1929) はその影響のもとに書かれた。ハイネの影響は、『ハルツへの旅からの影絵』Skyggebilder af en Rejse til Harzen, det sachsiske Schweig etc. (1832) に現れている。アンデルセンは、1830年代のはじめ、ワルター・スコットの文体にならって小説を書こうとしたが、それは不成功に終り、スコットの影響は、歌詩に生かされたにとどまった。しかしアンデルセンがこれら外国の大詩人たちをまねて、自ら大詩人になろうとしたことは、彼の作品において、気分と幻想の過剰となって現れ、そして感情だけを頼りにする結果になった。その頃の極く平凡な作品は、北欧民謡からとった『アグネーテと人魚』Agnete og Havmand (1834) である。この詩では、ロマンティックの永遠に充されない憧憬の象徴としてのアグネーテは、二つの世界に分裂して住まわされている。しかしアンデルセンは、この作品を転機として、飛躍をとげた⁽¹²⁾。

アンデルセンは、1833年4月から国家奨学を得てイタリアに旅行し、ここで絵画、彫刻その他イタリア芸術に接し、詞人としての大転換をとげる。イタリアは、彼にとって、現実性としてそこに置かれてある。彼は、そこでは、もはや、幻想とイロニーを過剰に駆使する必要はない。「現実性」をそのまま描けばよい。その見事な成果が、『即興詩人』Improvisatoren (1835) となって現れた。こうして、彼の作品は絵画的になった。彼は、こうして帰国後も、多くの作品において、「デンマーク」というものを、その外側から、絵画的に見事に描く手法を身につけた。その手法は、コペンハーゲンを、その内部から見事に描くギュルレンボー夫人の手法と対照的なものである⁽¹³⁾。しかし、1835年以後彼の詩的活動を決定的に特色づけたものは、「童話」Eventyr と「自伝」であった。彼は、人生そのものや自己の生涯を、「童話」Eventyr としてうけとり、「童話的方法」で表現して行くことにした。こうして彼の「童話」は、大人に読ませるための人生童話

となった。彼は、その作品によって、人間の靈魂の深い秘密、人間の悲しい運命、悲惨な自己中心主義などを描いて行った。彼の「童話」は、ファンタジーによる現実性描写及び思想詩 *Fantasiens Virkelighedsskirtring og Tankedigtning* として規定することができる⁽¹⁴⁾。

3. フレゼリック・パルダン-ミュラー *Frederik Paludan-Müller* (1809-76) バイロン-ハイネの線は、このほか、E・オーアストルップ *Emil Aarestrup* (1800-56) C・バッガー *Carl Bagger* (1807-46), そしてパルダン-ミュラーへと現れて行くが、とりわけバイロンの思想だけに関して言うならば、それは、後者二人にもっともよく現れている。即ち、バイロンの思想は、バッガーにおいては、「反抗精神」及び「激動する精神」として現れ、パルダン-ミュラーにおいては、「否定の精神」或は「拒絶の精神」として現れている⁽¹⁵⁾。しかし、このバイロンの思想を、自らの「憂愁」の深さに即してうけとめ、それをもって自らの「憂愁」を、そのまさに最深の根から表現したのは、パルダン-ミュラーであった。この意味において彼は象徴的存在である。

パルダン-ミュラーは、その内部に、既に二つの「精神」の葛藤を、宿命として抱えてきた。即ち、父親は、哲学的な素質を豊かにもった神学者であり、1830年間から16年間も、オーフース教区の監督をした。母は、神経病をもち、1820年、精神病で亡くなった。このため、息子は、幼くして母性愛に憧れ、常に自分より年上の女性を愛する傾向をもっていた。こうして彼においては、神への憧れと母性愛への憧れとが一つになっていた。彼は、1828年大学に入学し、1835年法学の国家試験に合格した。しかし彼は一度も正式の職につかなかった。というのは、彼は、久しい以前から詩的生活に入っていたからである。しかし、既に1830年頃から、彼の文章には、「憂鬱」*Tungsind* が顔をのぞかせていた。彼のテーマは「愛」であったが、1832年頃から書かれた劇作には、愛が常にグロテスクに、また苦悩として扱われ、愛の破局が問題とされていた。1837年は、彼の転換の

年となった。その8月と9月の間大病を煩った。彼はそれを「チフスと神経病の混合したもの」と言っている。この危機をのり越え彼は、翌1838年8月、自分よりも7才も年上の女性カリーテ・ボークと結婚し、2年間の外国旅行に出かけ、フランス、スイス、イタリー、オーストリー、そしてドイツと廻った。帰国後、彼は、神話的戯曲及びスタンザ形式の小説の作成と取り組んだ。⁽¹⁶⁾ 1842年-9年の間に、彼の名を不朽ならしめた代表作品が出た。それが、スタンザ形式の小説『アダム・ホモ』Adam Homo (1842-9)である。この作品は、この時期のデンマーク文学界、精神界の状況を集約して打ち出したものであり、デンマーク文学史上、文字通り、この時期の象徴的作品となっている。しかし、これはデンマーク文学史のみならず、もしヨーロッパの思想史の中で、実存思想の父をキルケゴールとするとしても、実際においては、「実存思想」の営みを彼よりももっとはっきりした形で展開していたのは、パルーダン-ミュラーの『アダム・ホモ』だったのである。キルケゴールが「実存思想」を展開した手記は、既に1835年にあるが、それらはあくまで日誌であることを考えるなら、デンマーク文学史上、「実存思想」を展開した最初の正式な作品は、この『アダム・ホモ』ということになる。⁽¹⁷⁾

この『アダム・ホモ』のモチーフは、意志を失ったエゴイズムを折檻し、諦念における敬虔な精神を称揚する点にある。パルーダン-ミュラーの「否定の精神」は、この作品では嘲笑、懐疑、絶望という形をとって表現されているが、それらは、結局、「存在」への問いを軸として回転しているのである。

その一例をひこう。それは第Ⅱ部で、場面は教区牧師の家の庭で、その牧師の息子アダムが文法の宿題を勉強しており、そのむずかしい箇所を母親にたずねているところである（次の傍点は筆者）。

ああ、お母さん、あるということ at være は、一体どういうことなのですか。

ぼくには、その言葉の意味が、全くわかりません。

それなのにお父さんは、ぼくが、それを完全にわかるまで勉強しろというのです。いま、ぼくは、自分の宿題を一点一画もおろそかにすることなくやりとげました。

けれども、そのあるということの意味だけは、全くわからないのです。母であるこの牧師夫人は、息子のこのむずかしい質問を、子供にわかり易いようにと、まず小鳥の例をひいて説明する。

いいかい、アダム、小鳥たちにとっては、歌うこと、飛ぶこと、ひな鳥を養うこと、それが、あるということなのですよ。

彼女は次に、木の例をひく。

木にとって、あるということは、緑の森のようにこんもりと立っていること、

つまり、芽を、次々とふいて行き、

やがて、枝を、長い腕のように延ばし、そのようにして、十分な日光と暖かさを身に浴びていることなのですよ。

このようにして最後に彼女は、彼女自身があるということの説明をする。

いいかいアダム、お母さんが、お前を手に抱いて、

同じ瞬間に、お前とお母さん自身のために、

同じ一つお祈りをささげるとき、

ああ、その時こそ、お母さんは、あるということとはどんなことかを、心ゆくばかり感じているのです。

右の母親の言葉には明らかに、「存在」の意味が、はっきりと示されている。あるということは、鳥にとっては、飛ぶことであり、木にとっては、生長することである。言い換えるなら、自由の可能性において自己自身となって行くことである。こうして人間の「存在」とは、祈りにおいて「神的なもの」との一致を得ることである。しかし、この作品『アダム・ホモ』の全体は、少年アダムの生活が、徐々に空虚な生活へと転じて行くことに

よって、いかにして人間の本来的存在が、非本来的存在へと転じて行くかを描いたものである。

このように、パルードン-ミューラーは、「存在」への問いを軸とした「憂鬱」「懐疑」「絶望」を描いているが、しかしそれを神と女性への信仰という立場によって超克しようとしている。即ち、彼はここで、内面的精神生活への絶対的信仰という立場を打ち出している。こうして彼は、その立場から、時代に起った愛の肉体化現象と、精神の外面的傾向に、批判の眼をむけている。

さて以上三人の人物について述べたが、この三人の日陰者の中にこそ、「時代の精神的状況」は、もっとも色濃く反映していた。しかし彼らは、アンデルセンを除くなら彼らの内部に起っているその問題が、ただ自己の内部だけの問題と考え、それが「時代」の問題、「時代精神」の問題であることに全然気付かなかった。即ち彼らは、自己がそのような状況にあるのは、「時代精神」の「危機的状況」を反映していることに気付かなかった。しかしキルケゴールは、この三人に、とりわけパルードン-ミューラーにおいてももっとも徹底化された仕方で提起されている問題をしっかりと受けとめ、彼の精神の底知れない深さに即して再提起したのである。

4. 個 別 性 の 思 想

L・ホルベア Ludvig Holberg (1684-1754) 以来のデンマークの精神史の中でもっとも特徴的なものは、個別性(単独性) Enkelthed の思想の伝統であった。しかしこの伝統がもっとも大寫しに開花したのがこの時期の思想界であった。従ってこの系譜に属する思想家は多数いるが、ここでは、その代表的な人物としてキルケゴールの二人の師 F・C・シベアン教授と P・M・メーラー教授とをとりあげよう。

1. F・C・シベアン F. C. Sibbern (1785-1872) シベアン教授につ

いては本来はさまざまな角度から、さまざまな面について述べなければならないが、ここでは、彼の思想の基本線だけを解明したいと思う。

彼がコペンハーゲン大学の教授になったのは、キルケゴールが生れた1813年であったことは知られている通りであるが、彼は或る意味では、ハイペーアや次に述べるP・M・メーラーと共にもっともデンマーク人らしい教授と言えよう。彼は、文学、心理学、哲学、神学、自然科学とあらゆる領域での研究を行い、その著作はまことに尨大な量にのぼる。従って彼をどの領域を通じて評価すべきかちょっとむずかしいが、後世は心理学者としての彼をもっとも高く評価している。キルケゴールの著作は、『不安の概念』はじめ多くのものが心理学的方法に則っているが、それらはいずれもこのシベアン教授の講義及び著作に大きく影響されている。彼は青年時代は、周知のようにロマンティックの精神にすっかりとらわれていたが、徐々にロマンティック的思弁を脱して、世界観を経験的心理学と自然科学の上に基礎付けようとした。こうして彼は、超越的なオーソドクス・キリスト教に基く人生観の代りに、徐々に、自由思想家的な人生観を展開させていった。そして年齢が増すに従って、ますます自己を哲学者として確立して行くようになったが、彼の影響力は、ますます弱いものになって行った。彼は後年大へん奇矯な人間と考えられたが、彼の性質は開放的で、善意で、また愛すべき素朴さをもっていた。⁽¹⁸⁾

さて、N・トゥルストルップによると、彼の思想には二つの契機がある。一つは、彼のキリスト教哲学であり、もう一つは、ヘーゲル哲学に対する態度である。⁽¹⁹⁾

先ず、彼のキリスト教哲学について述べてみよう。

彼のキリスト教哲学の講義は、マルテンセンに大きな影響を与えたことで有名であるが、1833年-34年冬学期のキリスト教哲学の講義は、キルケゴールも聴講している。とくにその時の講義においては、シベアンは、宗教と思弁との合一を計ろうとした。即ち、彼は、キリスト教の真理性を証

明することができるところのキリスト教哲学を展開させることは可能であり、真に純粹の思弁は、当然に、キリスト教の教義の中で述べられているものへと至るにちがいない、と考えている。彼のキリスト教哲学の前提は、客観的に見るなら、キリスト教の真理と合理性であり、主体的には、キリスト教の精神と教義によって貫かれている。キリスト教哲学は、その出発点を、キリスト教の実存における中心的なもの並びに原初的なものとしての信仰の中にとる。従って思考は第二次的なものとなるが、決して、非本質的な契機なのではない。信仰は、それが精神生活にとって生々として、確固とした原理であるときのみ真理であり、また、それは、キリスト教の真理が内面的証人によって人間のための真理として証明されるときのみ、祝福をうける。しかしこの内面的確証は、理性的認識にまで高められ得る。こうして、哲学の方法によって、キリストにおける三位一体の神の救済の啓示の意味を理解することができる。つまり、キリスト教と哲学とは合一され得る。人生と哲学における普遍的原理はキリストである。しかしだからといって、キリスト教哲学が啓示そのものだということではない。啓示は、聖書の中で告知されている歴史的事実であり、聖書の各書は、決して哲学的認識によって作成されたものではない。哲学的認識は、認識の出発点であり終点である信仰を決して揚棄しない。⁽²⁰⁾

次にヘーゲル哲学に対する態度について述べよう。

シベアンは前述のように自然科学を研究したが、その領域は、数学、物理学、動物学、生理学の広範に及んでいる。こうして彼は、たえず、思考に対する経験の意義を強調しているが、このことがヘーゲルに対する彼の態度を決定していると言ってよい。即ち、彼は、ヘーゲルの体系を全く不満足に思っている。彼は、1838年『文学月刊雑誌』Maanedsskrift for Litteratur に『現代との関係から考察された主としてヘーゲルの哲学に関する所見と研究』Bemærkninger og Undersøgelser fornemmelig betræffende Hegels Philosophie, betragtet i Forhold til vor Tid と題する大

論文を書き、ヘーゲル哲学に徹底的な批判を投げている。その批判は、次の三点に対して向けられている。

第一は、ヘーゲルが経験を軽視している点に向けられている。彼は次のように言う。

「意識が存在すること、良心が存在すること、道徳が存在すること、人間の精神が存在すること、認識や意志が存在すること、哲学が存在すること等々これらのことは、ヘーゲルにおいては、自己自身を余りにも多く意識することである。そして彼の哲学が居を占めたところでは、疑うということとはまったく鳴りをひそめてしまう。」

「ヘーゲルの自然哲学は、彼の体系の恥部をなしている……そしてそれは、物理学や生理学が提供している成果に対して少なからず無意味な誤れる関係を結ぼうとする⁽²¹⁾。」

第二は、ヘーゲルの弁証法的方法に向けられている。即ち、シベアンによるなら、ヘーゲルの弁証法は、その方法自体が、既にその起源において、論理的誤謬を犯しており、つまり、そこからは生成 Werden という概念は出てこない、と言う。

「弁証法的方法の論理的基礎、つまり、矛盾の原理の普遍妥当性の否定は、当然に、この否定自身の否定へと至り、従ってまたもやその矛盾の原理を、普遍妥当的なものとして確立することになる。……ヘーゲルの純有 *reines Seyn* が無 *Nichts* であると言われるとき、この純有は、実は、設定されうる一番最初の概念を知らせるための単なる反省のことばにしかすぎない。しかしその場合最初の前進がなされたのではなく、また、無は存在以外の何ものでもあり得ず、その存在によってその純有は確定することになる……その根拠において全く曖昧なヘーゲルの最初の諸規定は、どうでもよいものである。そして人がヘーゲルにおいて運動のための足場や場所が存在する土壌を問題にするためには、*Seyn* と云う概念から *Anders-seyn* 及び *Dasein* という概念のところに行かなければならず、あの仲介的

な、意味もなく根拠もないようなものを、しかしそれ故にこそヘーゲルには意味のあるものを跳び超えなければならない。何故ならそれは、生成の概念が、概念がそれ自らにおいて豊になって行くのに当然なすべき論争や深い考察の対象となることをさまたげてきたからである。⁽²²⁾

第三は、ヘーゲルの宗教哲学にむけられている。即ち、ヘーゲルは、彼の全体系を、『絶対精神』という標題のもとで、芸術、啓示宗教、哲学の三者をもって終熄させており、啓示宗教が、ここでは芸術と哲学の中間に位置づけられていることは、まことにおかしいとなす。何故なら、啓示宗教とは、三位一体の神を示すものであるが、この全世界を包括し全世界の根拠であるところの、つまり全体系を包括する三位一体の神がヘーゲルにおいては、彼の三段階法の一つになり真中にはさまっているからだとなす。⁽²³⁾

以上の二つの著作を通じてわかることは、シベアンのヘーゲル批判は、ヘーゲルの思弁が「経験」の基礎の上に立っていない抽象的なものだという主張に貫らぬかれている。

さて、哲学へのシベアンの見解は、生涯を通じてかなりの変化をみせているが、にも拘らず一貫していることは、哲学的認識を「経験」の上に基礎づけようとしたことである。即ち彼の一貫する主張は、哲学は、「経験に基く所与の分析」をモットーとしなければならない、ということである。彼において所与とは、現実態の「差別性」そのものである。彼は、この観方を人間に適用し、それ故、彼において、人間存在は、「個別者」として登場させられる。従って彼においては、神もこの「個別者」との個別的、主体的関係においてのみ考えられる。このようにして彼は、心理学的、経験的立場を通じて、個別者の存在の権利を尊重するデンマーク思想史の伝統的な流れをうけついでいる。つまり個別者の思想を、心理学的・経験的方法によって深めたところにシベアンの特徴がある。⁽²⁴⁾

ところで、この個別者の思想を、もっとも精神的-実存的に深めたのが P・M・メーラーである。

2. P・M・メーラー P. M. Møller (1794-1838) P・M・メーラーは、1826年32才でノルウェーのクリスチアニア大学の教授になったが、1830年11月からコペンハーゲン大学の教授になった。彼をひっぱったのは、シベアン教授だった。ところでこの年は、丁度キルケゴールが同大学に入学した年だった。こうしてメーラーは、1838年3月死ぬまで、学生キルケゴールと親交を結びながら、その職にあったのである。

メーラーは、シベアンと並んで恐らく最もデンマーク人的な思想家であり、彼は全デンマーク人の思想的体質のエッセンスをそのまま体現しているような人物で、何よりも特徴的なのは、シベアンとは異って、もっとも同時代的であり、即ち「精神的-実存的」であった点である。つまり彼の精神の中には「時代の精神的状況」がそのまま響いていた。メーラーの学者としての生涯がシベアンと全く異なる点は、彼はこれとって大きな著作や論文を遺しておらず、殆んどのが「断片」と評論的なものばかりであるという点である。しかしそこにこそ彼の「思想的体質」の特徴がはっきりと現れている。しかし、彼は正にその故にこそ「文芸批評家」としての独自の領域を切り拓いた。

彼の思想は、本質的に非体系的-実存的なもので、それは彼の実存的内面性の深みから「全人的思惟(人格的思惟)」となって現れている。こうして「個別性の思想」は彼において殆んど完璧なまでに深められている。

われわれは二つの論文から彼の思想の特徴を探ってみよう。

彼がシベアンと最も異なる特徴は彼の初期はヘーゲルの影響下にあったことであり、それをやがて突破したところにあるが、ヘーゲルへの彼のある種の共感は『藁の思想』Strøgtanker (1822)の中に現れている。この題名の意味は、とるに足らぬ思想という意味である。この要旨は次の通りである。思弁の意義は、或る一つの視点が首尾一貫して維持し貫徹されるということの中にある。自然と経験の中には多様性及び多面性が支配しており、これに対して体系は一面的であり、全くの虚構であるとしても、人が

それを研究するときは、反省の蓄積に没頭するときよりもより多く現実的な教養を与えるものである。人は有機的な首尾一貫性によって思考することを学ばなければならない。自己の世界観を有機的全体的関聯において陳述することは意味深いことである。——この論文の大要は以上の通りであるが、メーラーは、この時期、体系の必要を認めていたのである。ところが彼は、この立場にとどまっていることはできなくなった。それには二つの理由があった。第一は、諸々の哲学的問題は思弁的方法によっては解決され得ず、それらは、人が思弁的方法によって想像するのとは全く異った様相をなしたものであること、従って思弁的概念によって提起された問題自体が、即ちそのような設問方法自体が無効である、となす。第二は思弁哲学には、個別性或は個人性 Individualitet の意義への感覚が欠如していること、それらさまざまな個別性は、先験的認識によっては認識され得ず、ただ経験的方法によってのみ見出されるとなす。このようにして彼は、思弁的立場を廃棄し、経験的方法によって個別性の研究へと入って行った。⁽²⁵⁾

しかし彼をしてヘーゲルから訣別させたものは、彼の思想的体質であった。彼の思想的体質は二つの概念で表わされる。それは、「ユーモア」と「絶望」である。

先ずユーモアについてであるが、ヘフディングは、メーラーをヘーゲルから訣別せしめたのは彼の健全なユーモアだと言う。⁽²⁶⁾ キルケゴールは次のように言っている。「ひと頃ポール・メーラーは、殆んど憤りをもってヘーゲルのことを語っていた。しかし彼の内部にある健全なユーモアの感覚がやがて彼に笑うことを、とりわけヘーゲル主義を笑うことを、いや、今になってもポール・メーラーのことを思い出すのだが、正しく心からそれを笑うことを、彼に教えたのである。……」と。キルケゴールは更にここでメーラーにおける笑いの尊さについて書いている。またメーラーがヘーゲルから訣別したことについてハイペーアはうまい表現を使った「メーラーがヘーゲルの体系に関心をもったのは彼の性質からして当然である。し

かしこの体系に止まることができなかつたのは、更に彼の性質からして当然である。⁽²⁷⁾」と。メーラーがヘーゲルの突破を「ユーモア」をもって行ったことはまことに意味深い。その「ユーモア」の意味するものは実に重大なのである。

メーラーがこのようにして反ヘーゲル的立場に立ち、自己の思想がすっかり円熟した死ぬ一年前に書いたのが、彼の最も有名な論文『人間の不死性証明の可能性についての考え——この問題に関する最近の文学を顧みつつ』Tanke over Muligheden af Beviser for Menneskets Udødelighed, med hensyn til den nyeste derhen hørende Litteratur (1837) である。これについてはハイペーアがこれに反論する意味で『死後の靈魂、黙示録的喜劇』En Sjæl efter Døden, en apokalyptisk Comedie という極めて重要な作品を書いたが、このことはメーラーのその論文がいかに大きな意義をもっていたかを証明するものである。この論文には、メーラーの思想が集約されており、人はこの論文を読むことによりメーラーの思考そのものに直接接触したような思いがする。ヤンセン教授も指摘するようにこの書物がキルケゴールに与えた影響は極めて大きい。⁽²⁸⁾ この論文全体の内容は、次の興味深い箇所に集約されていると言ってよからう。

それは二人の友人が会話をする場面である。一人はフェアディナンという神学部出身の牧師候補生であり、他はユリウスという簿記係の男である。フェアディナンは今丁度一冊の本を本屋から買って帰ったところである。その本には『靈魂の不死性』という題名がついていた。ユリウスはそれを見て是非借りて読みたくなった。というのは、ユリウスにとってこの問題はどうしても明らかにしておかなければならない問題だったが、人間の死後の未来がどんなものであるかは未だ曾て解明してくれたものがいなかったからである。しかしフェアディナンはユリウスはいつも本を乱暴に扱うからという理由で、それを貸すことを拒んだ。そこで困ったのはユリウスである。それというのも、もうじき彼の二人の友人がやってきて、三人で

一緒にレストランへ行き新鮮な鰹を食べることになっていたからである。もうじき馬車がやってくる。貸す貸さないのは問答をしている時間が無い。彼は早くひげをそらなければならない。そこでユリウスは、フェアディナンに、自分がひげをそっている間に極く簡単に霊魂不死性のための最上の証明をしてほしいと頼んだ。「だけどいそいでそれをやってくれよ、僕はもうすぐむかえの馬車がここへ来やしないかと心配でたまらないんだからね。」フェアディナンは、その時やや控え目にこう答えた「予感というものを、つまり死後の世界における高次の生存ということへの一種の予感というものを強調する連中がいる」——「そんな点ならどんどん飛ばして行ってくれ、僕は、予感や共感なぞ信じてはいないのだから。僕が君から求めているのは、まさに、厳密にして確実なる証明なのだよ」——「君は、また、とりわけ人生の環境の善悪によってしばしば生ずる誤った状態に基いて来世を考えてはいけないよ。」——「その通りだ。善人は、自己犠牲や寛大さのために、しばしば多大の損失を招くにちがいない。けれども、それら善人に、彼らの善行による損失に先立って、誰かが、返済を約束しておいたのだろうか？つまり、美德はよい報酬が受けられ、悪徳は罰を受けるものだということを誰かが言っているのだろうか？だから君は、田舎の牧師が自分の管轄区域の堅信礼をうける子供達に対して尋ねることができるような根拠のない論証で僕が満足することができると思っではいけない。」——「それに、われわれが学校で通称道徳的証明と呼ぶものに似たような証明法が、フィヒテによって、学問的形式まで与えられているね。」——「しかし形式を超えて内容を語ってほしいものだ。……しかし、ほら、そこにもう馬車が来たよ。さあ、君はいま僕にはっきりした証明を紹介するかわりに、バルレの教科書の昔ながらの文章を反復して時を過ぎてしまったね。じゃあ、さようなら！」⁽²⁹⁾

さて、メーカーが、この論文で究明したことは、個別者のもっとも個別的な根本問題である「死の問題(不死性の問題)に関しては、思弁的方法も

経験的方法も、同格であり、無力であるということである。即ち、思弁は普遍的問題を設定するが解決はできない、経験的方法は、現存する個別性を或る限定の中で捕えることができても、その個別者の無限の内容を完全に捕えることはできない。従ってこの両者とも「個別者」の根本問題を解決することはできず、解決のためには、第三の高次の認識方法が必要であるとす。こうして彼は、この第三の高次の認識方法の確立を強調するが、結局、彼は、この問題がキリスト教的信仰によって解決するということに⁽⁸⁰⁾落着く。このようにしてメーラーは、キリスト教との間に実存的関係をもつようになる。

しかし、メーラーが「個別者」という概念をつかって問題としていたものはL・ホルベアからの伝統である「人間」における影と実体との⁽⁸¹⁾関係であった。彼自身が、この「影」との関係を深くもった人間であり、Vアナセンも言うように、彼は全人的な「絶望」をかかえており、それは、⁽⁸²⁾懐疑及び反抗の気分として現れていた。それ故にこそ、彼の求めたものは、全人的思惟を通じて全人的真理 Personlig Sandhed であった。われわれは、その代表的な作品として二つを挙げることができる。一つは、未完の稿『気取り』Affektation である。これはいかにもメーラーらしい概念であるが、彼はこれを、自由な意志として規定される真実の自己の対立概念とし、これを通じて、個別者の「内部と外部の矛盾の状況」を究明したのである。しかし、彼は、この究明にあたって、この矛盾を感じず「内部は外部であり、外部は内部である」となすデンマーク・ヘーゲル主義者達の「外見」(つまり外部)と「実体」(つまり内部)の矛盾関係を追求するという方法をとっており、いかにもメーラーらしい方法である。これが完成しておれば、デンマーク思想史にとってより大きな収穫となったろうと言われている。しかしこの思想は、更にもう一つの未完の稿『アハスヴェルス(永遠のユダヤ人)断章』Ahasverus-Fragmenter (1836)に生かされている。これは、彼の死後見出されたものだが、彼は、「永遠のユダヤ人」と

いう形象を用いて個別者の内部と外部の矛盾関係を徹底的に究明している。この二つにはメーラーの反ヘーゲル主義的立場と全人的真理、或は人格的真理への志向がもはや言葉としてではなく、文学形式そのものとなって現わされている。H・ヘフディングによるなら、『気取り』は、キルケゴールの審美的作品『あれか-これか』第一部の『輪作』に影響している⁽³⁸⁾という。しかし、『永遠のユダヤ人』のイデーは、キルケゴールの文学的立場そのものとなって影響している。彼の「永遠のユダヤ人」は、キルケゴールの「絶望」に言葉を与えることになった。

以上述べたことから明らかなように、F・C・シベアンが心理学的-経験的方法をもってうけついだ「個別性の思想」は、P・M・メーラーによって精神的-実存的方法によってぐっと深められ、もっとも内面化されて、次の世代へとひきつがれることになった。そして次の世代というのがS・キルケゴールである。H・ヘフディングは次のように言う。P・M・メーラーは、デンマークの哲学史上の典型的な存在である。後方に向ってはL・ホルベアと結ばれており、前方に向ってはS・キルケゴールへと結ばれて行く、と。⁽³²⁾

む す び

さて、今までの所において、1840年当時のデンマークの思想界における反ヘーゲル主義的色彩の思想を、三つのグループに即して見てきたわけだが、これらは決して「ヘーゲル思想」に対抗する意味で生れたものではなく、デンマーク特有の思想的精神的風土の中で生れたものであり、しかもこの三つが寄って同時代のデンマークの思想的精神的風土を構成していたのである。そしてキルケゴールの思想は、この三者が構成しているその思想的精神的風土の中で生れ育ったのである。しかしその成長は、一本の植物がその土壌から直線的に成長するのとは全く異り、この三者をシワ寄

せしてうけとめ、しかもそれを可能な限りの深さから無限に「反省」することを通じて行はれたものである。このように考えるときキルケゴールの「思想」は、とうてい平面的な概念的図式には還元することのできない測り知れない「精神の深さ」を弁証法的に保持しているものであることを更めて知らされる思いがする。(1967・1・15)

註

- (1) J. L. Heiberg: Prosaiske Skrifter I. S. 398.
- (2) J. P. Mynster: Blandede Skrifter II. S. 73ff.
- (3) M. Borup: J. L. Heiberg, II. S. 241.
- (4) J. P. Mynster: Meddelelser om mit Levnet. S. 241.
- (5) M. Borup: Ibid., II. S. 188. (6) Ibid., S. 188. (7) Ibid., S. 189.
- (8) F. J. B. Jansen: Danmarks Digtekunst. III. (1958), S. 161. Johannes Hohlenberg Søren Kierkegaard (1940), S. 21.
- (9) F. J. B. Jansen: Ibid., S. 148-50. (10) Ibid., S. 161-2. (11) Ibid., S. 164-6. (12) Ibid., S. 164. (13) Ibid., S. 165. (14) Ibid., S. 165. (15) Ibid., S. 167. (16) Ibid., S. 168.
- (17) Olaf Pedersen: Fra Kierkegaard til Sarte (1947), S. 11.
- (18) H. Høffding: Danske Filosofer (1909), S. 97-117.
- (19) N. Thulstrup: S. Kierkegaards Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift. II. (1962), S. 91-5. (20) Ibid., S. 92-3.
- (21), (22), (23) J. Himmelstrup: F. C. Sibbern (1934). S. 82ff.
- (24) H. Høffding: Ibid., S. 118. (25) Ibid., S. 119-20.
- (26) Ibid., S. 121. (27) Ibid., S. 121.
- (28) F. J. Billeskov Jansen: Studier i S. Ks litterære Kunst. (1951), S. 45-6.
- (29) Poul Møller: Efterladte Skrifter. Bd. II. (1842), S. 179-80.
- (30) H. Høffding: Ibid., S. 121.
- (31) Ibid., S. 123.
- (32) Ibid., S. 123.
- (33) Ibid., S. 123.
- (34) Ibid., S. 127.